高山の文化を高めた人々〈6〉

小峰大羽（こみねたいう）―その業績―

前越静二

新年度の協会事業のひとつとして、小峰大羽の句碑建立と資料展の開催が計画されている。

ここに大羽の人物と高山に齎した影響について紹介しておきたい。

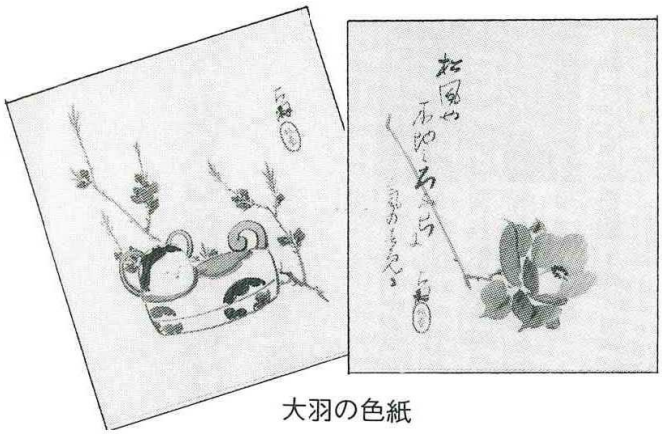
大羽は本名小峰邦寿、明治六年東京は神田駿河台に小峰一邦の嫡男として生れた。幼少の頃から洋画を榎本正史に、府立築地中学に進んでからは、狩野洞谷の門に日本画を学んだ。普通毛筆画教員資格を得たのち、各種画塾等の会員・客員となり、新聞や博文堂等の本の表紙画や挿画を手がけた。中学卒業と前後して俳句に興味をおぼえ、二十五才頃から新聞雑誌の文芸欄の選者として活躍するようになった。俳諧雑誌「高潮」の主宰となり、俳句大観、類題句集、新撰季語辞典（明治四十二年秀英舎火災のため原稿、校正刷悉く焼失）、季題大字典、東京語字典、季題解釋等の編著がある。

明治四十五年四月飛騨に入りこの時雲橋社、花蔭会、笹魚吟社による盛大な歓迎俳句大会が東照宮で開催された。

屋根石に風光る山の町に入る　大羽

飛騨高山の美しい自然と温雅な人情は大羽の心をとらえ、翌大正二年東京を引上げて高山に居を移した。それからの大羽の活躍は目覚しく。翌年には、押上森蔵、岡村利平等と飛騨史談会を起し、「飛騨史壇」を発行。

椎野誠一の遺稿を整理追補した「田中大秀翁」を完成。加藤千歩の出版「蘭亭遺稿」を編纂。



大羽の色紙

この書は昭和天皇の天覧の栄に浴している。又「山ずみ」、「草秋」、「凌宵」等の地方吟社の作句指導にあたり、美濃までその足跡が及んだ。特に山ずみ会の誕生には力を注ぎ、「小峰大羽、上木象雨、長瀬壺仙などの肝煎りで始まり、目指す指標は、花蔭会旧来の〝月並調〟に新風を盛り、より新しい格調を鼓吹するため、同調の人士を糾合しようというにあった。」と伝えている。だから同人に対する句評にしても「……自然に対して作家が遊離してゐる。余所事のやうに詠んでゐる。自然を凝視してヒントを掴まふとしてゐない。だから主観句においては、多く説明に墮してゐる。客観句においては、自己の存在を自ら忘れてゐるやうに思はれる。……」と厳しかった。

大正十四年四月には、文化十二年に雲橋社第一世宗匠、加藤歩簫が刻ましめた、蕉門の十哲の一人、凡兆の「わしの巣」の句碑が、茂住街道廃道となって、徒ら叢に埋もれ、句碑のあることも巷間の噂にとどまるに過ぎない実情にしのびず、加藤千歩、長尾桃雨等と句碑探訪を行っている。

昭和七年に名古屋へ移住「谺」を創刊するなど、その活躍は依然活溌なものがあった。

晩年は難を避けて、大森の息女新樹（わかき）の許に移ったが、昭和二十年五月二十四日東京大空襲の中、七十三才の生涯を閉じた。

当国、国文と考古学の権威、大野政雄先生は、大羽一周忌の句文集「五月山」に、高山に大羽の句碑建立の企てあって然るべしと記しておられる。